

## セッション報告「1977年のイタリア」

本セッションは、1977年にイタリアで刊行された2冊の著作、すなわちアントニオ・ネグリの『国家形態 *Forma Stato*』とアルベルト・メルッチの『政治システム・政党・社会運動 *Sistema politico, partiti, movimenti sociali*』をとりあげ、77年にピークを迎える議会外左翼を中心とする多様な社会運動と社会思想の共振現象の意味について考察した。司会者は中村勝己会員が、報告者は遠藤孝会員と保坂直人会員がつとめた。

冒頭、中村会員は、1977年のイタリアに焦点を絞る意義を、次のように指摘した。(1) 通常〈68年革命〉が思想史的に問題とされることは多いが、68年の学生反乱のテンションが1977年まで続いたとされるイタリアの事例には日本でこれまであまり関心が集まらなかった。しかるに本国イタリアではここ数年、60—70年代の議会外左翼を中心とする社会運動と社会思想の本格的な研究が進んでいる。(2) 70年代のイタリア議会外左翼の運動は通常〈アウトノミア〉と呼ばれるが、そのなかにも様ざまな傾向が存在した。女性解放運動やメトロポリタンインディアン(都市エコロジー派)などが登場したのも70年代である。他方でこれと並行する形で当事者の主観としては「本格的な武装闘争」(都市ゲリラ志向)を唱えた勢力も伸長した(代表的な組織はブリガーテ・ロッセ=赤い旅団)。ネグリの理論活動は、とりわけ前者に期待をかけるものだったが、理論上は後者ともある種の親和性があったのではないか。(3) こうした解放と暴力行使がせめぎあう特異な時代としての1977年を、その時代と並走しながら鋭利に分析しえた理論社会学者(社会運動論)がアルベルト・メルッチだったのではないか。メルッチは、オペライズモをも含む既成のマルクス主義理論では分析できなかった社会運動におけるコミュニケーション、承認、身体性などに焦点を当てることができており、今日から見ても新鮮な論点が揃っている。オペライズモの理論的精華としてのネグリの『国家形態』と社会運動論のメルッチ『政治システム・政党・社会運動』を対比することで何が見えてくるか、論じたい。

遠藤会員は、ネグリの『国家形態 *Forma Stato*』およびマリオ・トロンティの社会的工場論、そしてネグリの『戦略の工場 *La fabbrica della strategia*』を取りあげ、イタリアにおけるスターリン主義批判のマルクス主義理論潮流であるオペライズモ(労働者主義)の特徴を指摘し、とりわけケルゼン主義者のノルベルト・ボッピオを中心に1976年に行なわれた〈マルクス主義国家論争〉にネグリが介入した際の論考を分析した。イタリアにおける〈国家論のルネサンス〉を主導したのがボッピオであることは紛れもない事実であるが、ネグリによれば、「マルクス主義に国家論は存在するか」というボッピオの問いには経済過程の分析が欠落している。70年代のイタリアは、賃金が上昇したにもかかわらず経済成長が終息し若年失業率が高止まりした。こうした事情と〈政治危機〉、〈社会危機〉は無関係ではないはずなのに、経済過程の分析をせずに〈政治危機〉を論じたり、マルクス主義理論における政治論・国家論の欠落や不備を論じるボッピオの立場には大きな制約がある。第二に、ネグリの『戦略の工場』では、〈資本の下への社会の実質的包摂〉という社会的工場論が展開されて

おり、そこから〈権力の充満状態〉というマルクス主義権力論の新しい視角が読み取れる。ネグリが分析した〈社会に充満する権力〉との闘争という意味で 70 年代の青年による社会運動を捉えることができる。ボッピオには社会運動論が実質的にない。この二点でオペライズモ、とりわけアントニオ・ネグリの理論的優位性を指摘することができる、とした。

保坂会員は、メルッチがカトリック青年運動から出発しながらもアントニオ・グラムシのマルクス主義理論の影響下で社会学を学んだこと、しかしカトリック青年運動にもマルクス主義理論にもある種の〈全体性への志向〉が共通してあることに不満を覚え、それがポーランド留学により現存社会主義への幻滅および批判へとつながったと説明した。そのうえで、メルッチの『政治システム・政党・社会運動』は、米国の機能主義理論（社会システム理論）、フランスの社会運動論（アラン・トゥレーヌ）、イタリアのマルクス主義理論（アントニオ・グラムシ）などを使いながら、60 年代末から続く反体制の青年運動の諸特徴を把握しており、そこには、『現在に生きる遊牧民』（1989）以降の〈新しい社会運動〉論の新展開がすでに内包されている。すなわち、社会運動における承認→アイデンティティなどに焦点を当てることができている。たとえば、性の解放に性の商品化が随伴して進行してしまっていること、古い共同体の縛りを超えて希求される新しい共同性への欲求が私生活主義の蔓延に伴って新たな家族主義に囲い込まれてしまう姿など、ポスト工業化社会のジレンマ、新たに生じつつある解放と束縛の相克を描いている。また、青年の社会運動のなかに見られる暴力志向にも批判的かつ冷静な分析がなされており、同時代診断としても優れていることを指摘した。

質疑応答では中村会員から遠藤会員に向けて、（1）ケルゼン主義（ボッピオ）には経済過程分析がないがマルクス主義（ネグリ）にはそれがある、というネグリの批判は、それだけではボッピオ批判として不十分ではないか、（2）70 年代のネグリの議論には、一方で〈資本の下への社会の実質的包摂〉や〈権力の充満状態〉といった現代社会論として独創的であると同時にミシェル・フーコーとの同時代性を感じさせるような魅力的なテーゼが含まれるが、他方ではボッピオ批判の際に見られるような教条主義的マルクス主義のドグマ性があるのではないか、という二点の質問が出された。遠藤会員からは、今後の検討課題であるという応答があった。

中村会員から保坂会員に向けて、（1）メルッチは 70 年代イタリアの議会外左翼を中心とする社会運動が暴力志向を含み、さらにはブリガーテ・ロッセなどの赤色テロ集団を生み出した原因なり背景を分析・説明できているのか、（2）既成のマルクス主義理論や機能主義社会学には見られない社会運動における「承認→アイデンティティ」、また「身体性」などにメルッチが着目できた理由は何かという二点の質問が出された。保坂会員からは、（1）原因の分析とまでは言えないかも知れないが、カトリック青年運動とマルクス主義理論に共通するある種の〈全体性への志向〉が 70 年代青年運動のなかにも根強くあることが指摘されている、（2）メルッチの身体論への着目の源泉がどこにあるのかについては目下調査・研究中であるという応答があった。

会場からは、中村会員に対して、「70年代の赤色テロ組織の伸長」という言い方でブリガーテ・ロッセを位置づけているが、そもそも当事者たちは「国家中枢を直接攻撃する」「武装闘争」という位置づけであり、「テロリズム」という自己規定はしていない。また、「《ブリガーテ・ロッセは1975年6月にアジトを急襲した警察との銃撃戦の末、女性幹部マルゲリータ・カゴルが射殺されてからテロリズム志向に変質した》という説明があったが、はたしてどこまで史実に即しているだろうか」という質問ないしコメントがなされた。

さらには、やはり70年代のブリガーテ・ロッセなどの活動はテロリズムと定義すべきであり、しかしなぜあれほどまでにテロリズムが猖獗したのか、意見を聴きたいという質問、また、メルッチの社会運動論は本人の早逝のために未完成のままになってしまったが、現在の社会運動論のなかではどのように評価されているのか、といった質問などが出された。それらの質問すべてに応答する前に時間切れとなり、今後も「1977年のイタリア」における社会運動と社会思想の沸騰状況に関連する議論を継続することを確認してセッションを閉じた。